

論文

“スキヤキ・エレジー”をM-Mシステムで読む

—導入教育としての「人間生活学」における試み—

飯村 しのぶ*・石井 よう子*

1. はじめに

本学人間生活学科では、大学における導入教育のひとつとして複数の教員によるオムニバスの授業「人間生活学」(1年前期・2単位必修)を開講している。本年度は9人の学科専任教員がそれぞれ1回～4回の講義を担当した。

第1回はガイダンスとして「高校での学び・大学での学び」(内田・飯村担当)と題し、大学における学びがこれまでの高校での学びとどのように異なるかを概説した。第2回以降は各教員が自分の専門領域をとくに人間生活に結びつけた内容として講義する形をとっている。この授業の目的のひとつは、学生がそれぞれの教員による講義をとおして、人間生活学科の教育あるいはその背景にある学問研究が様々な専門領域から人間生活に関する科学的なアプローチとしておこなわれていることを理解することにある。

このうち著者らは、飯村が第2回「人間生活学科で何を学ぶのか」と、第3回「人間生活について学ぶ方法は」および第14回「人間生活を総合的にみれば」と第15回「まとめ」を担当、石井は第7回「人間生活と食物～人間生活学科における食物学～」を担当した。

人間生活学科とは何を学ぶ学科なのか、この問いに対して入学してきた学生が全く無知であるということは基本的にはありえない。人間生活学科で学ぶということを前提に入学したのであるから。しかし実際には何をどう学ぶ学科なのかを一口で的確に説明するにも難しい点があるのは事実である。当該学科の専任教員自らが自分たちの学問的な専門領域が人間生活学科における教育体制の中でどのように位置づけられるのかについて考える必要に迫られるし、それぞれの持論はあるにしてもこの点について教員同士が互いに認識しあうこともこれまでは少なかった。そのような状況下では

*

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科

あるが、1年前期の導入教育としての「人間生活学」における15回の講義をとおして学生は本学科での教育内容のガイドラインを知ることができよう。

しかし人間生活学科における学びの特徴は、ただ単に各学問の専門領域が羅列してあるだけではなく、それらが互いにどのように結びついて人間生活が成り立っているのかの理解へ学生を導くことにあるといってもよい。人間の生活が多面的である以上、それを対象とした教育も多方面の専門領域を取り入れてなされるのは当然である。しかし各専門領域において得られた学生の知識がバラバラであったり、学んだ内容についての互いの関連性や、場合によっては食い違い、また一方の知見のみを強調することによって他の専門領域における知見とのバランスが崩れるなど、結果として人間生活をバラバラに分解して捉えることによる歪みが生じては本学科での学びの特徴は失われる。つまり人間生活学科での学びは人間生活を対象として総合的な視点を持った学びであることにその特徴がある。そこで著者らが考えているのは、各学問の専門領域に関する系統的な学習を前提にしつつも、学んだ(学んでいる)内容を互いに関連づけて考え、結果として人間生活を総合的に捉える思考方法を学生に身につけてもらいたいとのことである。

このような考えのもと、第2回「人間生活学科での学び」では、以上のような本学科での学び方の特徴について説明した。さらに“生活”について学ぶということの必要性や重要性について考える講義をした。つづく第3回では「人間生活について学ぶ方法は」として、前回の人間生活について学ぶことの大切さを認識したうえで、生活学における“生活”を捉える方法としてのM-Mシステムについて説明した。M-Mシステムとは、「人間生活を主体＝環境系として生態学的に認識し」¹⁾、その体系を①man—man（人—人の関係）、②man—mind（人—心の関係）、③man—matter（人—ことの関係）、④man—material（人—ものの関係）の4つの側面から捉える方法である。一方、第7回「人間生活と食物」では、人間生活学科での食の学びについて、学科のカリキュラムに添って説明した。人間らしい食事とはおいしさと楽しさを追求しながら、健康の維持増進をはかることを目的にしており、食生活課題の解決に当たっては栄養学の基礎はもちろんのこと、食習慣の多様性や食物選択の文化的基盤など様々な視点から学ぶことの必要性を述べた。

本稿は、前述のように飯村が担当した生活を学ぶ方法のひとつとしてのM-Mシステムと、石井が担当した「人間生活学科における食物学」の2つの領域を結びつけ、人間生活の諸領域のなかでもとくに食文化に関して相互の学問領域を関連づけて理解させる試みの実践報告である。具体的には、第14回「人間生活を総合的にみれば」の授業において、学生に「スキヤキ・エレジー」という短文を読ませ、それをM-Mシステムを使って考察すること、また場合によってはこの短文にふさわしいシナリオを自ら作成してもよいとする課題を出した。この試みをとおして、食生活とくに食文化といった内容が人間生活の中でどれほど多くの他の生活要素（人間関係、価値観、

心理状況、地域性、経済状況など)と結びついているのかを認識し、さらに自分の考察結果をどのように表現するかを問うたものである。

2. レポートの方法と評価の観点

学生には、「スキヤキエレジー」(資料 1 参照)を読み、その内容をM-Mシステムと結びつけて論じなさい。またこの場面の問題点を指摘し、その解決策について意見を述べなさい。場合によってはこの場面から想像されるシナリオを加えてもよい」と指示した。レポート形式はA4サイズで、40字×20行以上と指定し、それ以外は自由に記述させた。

レポート提出総数は90人であった。学生がこの短文を読み、その中での人一人の関係、人一心の関係、人—ことがらの関係、人—ものの関係(サブシステム人—お金の関係)をそれぞれどのように捉えたかについて、シナリオも含め記述内容を分類整理した上で若干の考察を加えてみたい。

3. man—man システム (人—人の関係)

「スキヤキ・エレジー」における人—人の関係を学生はどのように読みとったのであろうか。家族構成や人間関係などについての主な記述を整理すると以下のものであった。登場人物についての年齢や職業などについては学生が作成したシナリオ部分である。

【学生のレポートから】

- ① 家族は、父親・母親・娘の3人である。
- ② 登場人物は、父、母、娘、そして父の友人の4人である。
- ③ 夫は定年退職して、老後を将棋サークルなどで楽しんでいる。妻は毎日の夫との生活に嫌気がさしている。ちなみに専業主婦である。娘は30代前半でいわゆる「負け犬」世代。
- ④ 父の故郷は新潟で母親は群馬の桐生だ。そんな家族のある日の休日の出来事と思う。
- ⑤ 夫と妻は結婚30年の夫婦で、夫婦の間は冷めている。互いに自分の趣味をみつけ、互いの感心はなくなっている。
- ⑥ 妻は、今まで働いていた夫がずっと家にいるため、自分の時間がなくなったことにいらだちを持っている。
- ⑦ 定年退職後、夫婦は自分たちの趣味に気持ちを傾け益々溝が深まっていく。
- ⑧ 夫は家の中で肩身の狭い思いをしている。
- ⑨ 父親はこの家族のなかではのけ者である。
- ⑩ 男1人に女2人となると、母娘の絆が深くなり父親の存在は薄くなってしまう。

その夜、妻が買ってきたスーパーの袋には、すき焼きの材料が入っていた。

「いやあ、今日将棋サークルのあと、すき焼きを食べたいと思ってたんだよ。いやあ、うれしいなあ」いくらか興奮した口調で話す私に、「食べてくれば良かったじゃない」と、妻は冷めた声で言った。「一人ですき焼きだなんて、老人になったみたいで寂しいよ」「あなたはもう立派に老人でしょう」書道のお手本がうまくいかない日の妻は、やけにとげとげしい。私はそんな時、妻の心と体をいたわって、そっとしておくことにしている。黙ってすき焼き用の鉄鍋と卓上コンロを用意し、皿の上に、肉、ネギ、しらたき、豆腐を盛りつけた。

妻はリモコンを手にテレビのスイッチを入れ、「これ、見たかったのよ」とお笑い番組を、ほおづえをつきながら無表情に眺めはじめた。私は無言で、鍋をコンロにかけ、火をつけた。

どこの家庭にも我が家の味があるものだが、とりわけ鍋料理には、その家それぞれの味つけがある。中でもすき焼きは、その最たるものだろう。我が家では、割り下で肉を煮る、いわゆる関東風である。肉と一緒に野菜や豆腐を入れるので、これはまあ、言うならばごった煮すき焼きである。昔からこうして食べてきたので、とくに疑問ももたなかったのだが、ある時友人の家ですき焼きをごちそうになって、私は眼からウロコが落ちる思いをした。その家では、まず肉を焼き、そこに砂糖としょうゆを入れる。そして肉を食べてから、次はネギ、ネギの次は豆腐、というように、最初の肉汁をベースに、順に具を煮ていくのである。我が家のすき焼きとのあまりの違いにびっくりして訊ねてみると、「これが関西風なのだ」と友人は言った。関東風のごった煮すき焼きは、京都の学生が思いついた、貧乏人向けのものなのだ、と言う。つまり、肉を少ししか買えないので、そのぶんを野菜や豆腐で補ったのだそうだ。私は友人の家の関西風すき焼きを食べて、初めて、すき焼きの“焼き”の意味を知ったのだった。

その日のすき焼きは、関西風にしようと私は決めた。ところが、最初に肉を焼こうとすると、妻が横から割り下を注ぎ入れ、野菜と豆腐、さらには春菊まで放り込んだ。「何するんだよ」すでに酒の入っていた私は、やや逆上気味に言った。「これが我が家の味だから」と、妻はおかまいなしである。「すき焼きを食いたかったのに、これではすき鍋ではないか」「あれ、面倒くさくて。それにおなかに入っちゃえば一緒でしょ」しらたきを食べながら妻は言った。

「だいいち、関西風っていうけど、あなたの故郷は新潟でしょ。のっぺい汁じゃない」

すき焼きを邪魔されたばかりか、故郷にまでケチをつけられた私は、かっとして、「お前の故郷は群馬の桐生だろう。桐生ではすき焼きに豚肉を入れていたんだらう」と、声を荒げてしまった。

逆上した私を冷たい眼で見ながら、妻は「のっぺいのくせに」と、鍋に割り下をどほどほと注ぎ足した。

「おっ、すき焼きか。いいにおいだな」帰ってきた娘は、通勤着の格好のままテーブルにつくや、「うちのすき焼きはうまいんだよな」と、うれしそうに鍋に箸をのぼした。「これはすき焼きではない」とわたしが言うと、「酔っぱらいはいちいちうるせえんだよ」と私を睨んだ。

妻と娘はくだらないテレビに大笑いしながら、すき焼きを平らげていった。暗い眼で鍋を見つめている私に、「たべないの」と娘が言った。

- ⑪ 父は妻の尻に敷かれていて娘にもあまり好かれていない。母と娘のあまりにも冷たい態度に家族のあり方について考えさせられた。
- ⑫ この家族も、子どもが小さい頃はもっとあたたかい家庭であったと思う。
- ⑬ 夫婦は家族であってもやっぱり他人だし、親子は他人ではない。
- ⑭ 娘は社会人であるがあまり行儀がいいとはいえず、言葉遣いも荒い。自宅に住み、食事も親の作ったものを食べ、少々自立心が欠けているように想われる。
- ⑮ 3人家族で、妻のとげとげしい言い方や娘の生意気なところはどここの家庭にもある光景。
- ⑯ 妻と娘がスキヤキを食べながらテレビをみて大笑いをし、夫の存在は目の前から消えている。
- ⑰ 娘はまだ若いOLで、仕事帰りで疲れていたために父親に冷たい態度をとってしまうのはどこの家庭でもあることだが、最終的にはつまらない意地の張り合いをしている父親と母親の良い潤滑油となっている。
- ⑱ 自分の家と同じ様に思え、すごく普通で身近な家族である。

以上の学生のレポートから、この家族の出来事を通じて、学生には自分の場合を含め家族というものを客観的に捉え直し理解しようとする姿勢がみられた。登場人物を3人とする者がほとんどであったなかで、今回のトラブルのもとになった関西風のスキヤキの主である父親の友人を隠れた存在ではあるが大事な登場人物として指摘した学生が2人いた。

人一人の関係、今回はとくに家族の人間関係が主になっているが、学生が自分の家族をあるいは現在の日本の家族の状況をどのように捉え、どのような問題意識をもっているのかをうかがい知ることができた。すなわち、家族といえどもそのなかでの人間関係はさまざまである。時間の経過によって家族内の人間関係も変化していくこと、とくに夫の定年退職後における夫婦関係の難しさ、また母と娘の関係は強く、父親がのけ者になりがちであることなどである。しかもこれがごく普通で身近な家族像であるともしている。

さらに娘の立場を夫婦間の潤滑油として評価した学生と、反対に娘も父親を馬鹿にしていると捉えた学生の双方に見解が分かれた。この背景には、父親と母親の関係、また自分と父親、自分と母親の関係について、学生は自らの家族に投影して判断しているのではないかと推測された。

4. man—mind システム (人—心の関係)

登場人物の人—心の関係をどのように捉えたか、主な内容をまとめると以下のようであった。

【学生のレポートから】

- ① 妻はいつも家にいる夫のことを少しうっとうしく思うこともある。
- ② 妻には夫の性格や態度にどこか不満の気持ちがあり、その気持ちが妻の態度に出てしまっている。かなり自己中心的である。夫も妻の気持ちに気づいているがおとなしい性格であるため何もせず知らない振りをしている。
- ③ 妻は夫の一言一言にいらだちさえ感じている。お笑い番組も無表情で見ていることから、よっぽど夫と一緒にいることが嫌であることがわかる。
- ④ 夫の「そっとしておく」という長いつきあいだからこそできるお互いの心のつながりに夫婦愛を感じる。
- ⑤ 夫は、妻の心理状態をきちんと理解した上で対応している。
- ⑥ 妻は書道のお手本がうまくかけず、イライラしている。夫は妻の心と裏腹に夕食が「スキヤキ」であるということではずんでいた。
- ⑦ 妻の「食べてくればよかったじゃない」と夫に冷たい発言は、夫婦間に心と心のつながりがなく、夫は一人でスキヤキを食べるより寂しいと思う。
- ⑧ 夫婦は家族といってもやっぱり他人だし、親子は他人ではないけれど一人一人持っている気持ちは違う。互いに理解しようとする心が大切だと思う。
- ⑨ 夫の心理状態として、妻にいつものスキヤキにされたことへの怒り、妻と娘が自分をのけ者にし、寂しい気持ち、取り残された様な気持ちになっている。
- ⑩ 妻は、スキヤキごときでハイテンションになるなというクールな気持ち。
- ⑪ 夫の心情と妻の心情の食い違い、夫はどうして「今日は関西風にしよう！」とひとこと言わなかったのでしょうか。
- ⑫ 不機嫌になった夫に対し、妻ももともとから不機嫌であったが、さらに不機嫌になってしまう。娘の登場により、娘は意識しているわけではないが場を取り持った形になっている。
- ⑬ 娘は「食べないの」と箸の進まない父親を気遣う様子はあるものの、父を尊敬しているとはみえず、思いやりに欠けるように思われる。
- ⑭ 暗い顔の夫に「食べないの」とあっけらかんに言う娘。この時夫の心はどうであったろう。自分の意見は全面否定され、人としてもけなされた様な状況にたたされ、怒りを通り越しどんなにか悲しんだであろう。
- ⑮ 娘は父親の気持ちを考えずに、無神経に「食べないの」というのはやめた方がよいだろう。何故食べないのか、そこを考えるべきだと思う。
- ⑯ 娘の「食べないの」といったのは優しさではなく、「食べないなら、全部たべちゃうよ」という意味である。
- ⑰ 娘は、父親が重い空気を背負っていることには全く気づいていない。
- ⑱ 娘は最後には「食べないの」と少し心配してくれているようだ。落ち込んでいる父親に気づいたのだ。

- ⑱ 夫の心の寂しさに妻はまるで無関心、娘は気づくはずもない。
- ⑳ 夫は妻のことをいたわろうとはしているが、スキヤキをじゃまされたという些細な問題で怒ってしまい、相手が疲れているということが見えなくなっている。この日は妻が疲れている事も考え、すぐに食べられる「すき鍋」にした方がいいのではという配慮も浮かんでいないよう。結局は(夫も)自分のことしか見えていないのだ。

学生はどちらかという夫の立場を擁護した心理状況のとらえ方をしている。夫は妻の心理状況を理解し、「そっとしておく」といった配慮をしている。一方妻はイライラしている。その原因は書道のお手本がうまく書けなかっただけではなく、夫の生活や態度にどこか不満があるのか、あるいはいつも家にいる夫のことをうっとうしく思っているからであると捉える。また、妻は自己中心的であるとする一方、夫も「今日は関西風にしよう」との一言を言って妻の理解を求めるか、あるいは今日は疲れている妻を気遣って関東風、つまり「すき鍋」で我慢しようといった判断もあったであろうとの指摘もある。日常的な夫婦間の心のやりとりがちゃんとおこなわれていれば、双方に互いを思いやる気持ちも生まれるが、この夫婦の場合はそうではない。娘の発言については、父親を気遣っているとする学生と、落ち込んでいる父親にまったく気づかない無神経さを指摘した学生とに分かれた。

5. man—matter システム (人—ことの関係)

人とこと(ことがら)との関係は、次のように捉えられた。

【学生のレポートから】

- ① 関西風スキヤキか関東風スキヤキかで、夫と妻が言い争っている。
- ② 今まで関東風であったスキヤキを、友人の影響で関西風に変えようとした夫に対し、妻はおかまいなしに関東風にした。
- ③ 関東風のスキヤキは、貧乏人向けのものという。夫は関西風のスキヤキを食べてはじめて“焼き”の意味を知った。
- ④ 妻は、「のっぺい汁」と馬鹿にした口調で夫に言い返す。
- ⑤ 父も家族の意見を聞かずに、関西風にしようとするなど、会話というものが少ないように感じられる。
- ⑥ 家族としての会話がない。妻が食事中にテレビをつけたりするが、それを夫はとがめない。娘の口調からしてもはや父親を父親としてみていない。
- ⑦ 夫と妻が会話をきちんとしていないことが問題である。
- ⑧ この家族のスキヤキは関東風である。関西風はまさにスキ焼きである。文化の違いといった点からみて、妻の実家の桐生では牛肉ではなく豚肉を入れる。日本という狭い国でも、地域によって食文化にも少しずつ違いがある。

- ⑨ 割り下で煮る関東風も、焼いて食べる関西風も、それぞれの文化の違いを尊重しようという気持ちがあれば何も問題ではない。
- ⑩ 互いの出身地の文化の違いを責めるなんてもってのほかだ。結婚後も価値観の違いや考え方の違いを決して責めてはいけないと思う。
- ⑪ 夫と妻はそれぞれの文化を否定し、見下している。
- ⑫ 夫婦の趣味、つまり人とこととの関係としては、それぞれ自分の趣味を持ち、お互いに自由な時間を満喫している。
- ⑬ どこの家にも“我家の味”があるものだが、とくに鍋料理にはその家それぞれの味付けがある。
- ⑭ 妻の「食べてくればよかったじゃない」という言葉から、家族みんなでの食事が昔のように当たり前ではなくなったという変化がわかる。
- ⑮ この家族のスキヤキはいつも関東風であった。しかしそれはこの家族が貧乏だからではなく、妻が面倒がるためだ。またその関東風がこの家族の“家庭の味”なのである。
- ⑯ 時には、“わが家の味”にこだわるだけではなく、異なる食文化に眼を向けて新しいものを取り入れてみるのも重要だ。
- ⑰ 父はもっと一家の大黒柱として存在感を出していくべきだ。
- ⑱ 食事をするという事は、空腹を満たす、栄養を摂るという目的以外に、家族での団欒を楽しむ目的もある。

人—ことの関係の1つは、関西風スキヤキと関東風スキヤキの食文化の違いが挙げられる。スキヤキの食べ方をおして、この家族は食文化の違いを人間関係の断絶にまで反映させている。まさに「エレジー＝悲しい歌であるように、この物語はスキヤキを通して家庭でとても悲しい思いをする父親が主人公になっている」との学生の表現が的確であろう。人—ことの関係の2つ目は家族間のコミュニケーションの問題である。この家族の会話・コミュニケーションのなさを指摘する学生は多数であった。人—ことの関係の3つ目には、人と趣味についてが挙げられる。この夫婦はそれぞれ自分の趣味を持ち、互いにそれを満喫している。しかし夫婦共通の趣味はない。また“わが家の味”といった表現を使用した学生も多くみられた。娘にとっては関東風が“我が家の味”なので(うまい!)、何の疑問もなく父親に「食べないの」と言ったと思われる。父親に対する言葉としての「食べないの」という表現は、世代によって受けとり方や感じ方が異なるのであろう。

6. man—material システム (人—ものの関係)

人—ものの関係は、生活財の所有状況やその利用実態、家庭の景観などの変化をおして「生活」を捉えようとするものである。またそのサブ・システムとして人—お

金の関係も含まれる。学生はこれらの関係を以下のように捉えた。

【学生のレポートから】

- ① 関東風と関西風では、肉の種類や野菜の量の違いも考えると、経済的な面（man-money の関係）も関わってくる。
- ② 関西風のスキヤキだとお金がかかる。今まで一度も関西風のスキヤキは食べたことがない。
- ③ 父はスキヤキを作る。父が食べたかったのは関西風のスキヤキだったので作ったのだが、母は横から手を出してお腹に入れれば一緒といって、いつもの関東風にしてしまう。
- ④ 妻と娘は全く関西風すき焼きに興味を示さない。
- ⑤ この日、夫は黙ってすき焼き用の鉄鍋と卓上コンロを用意し、皿の上に肉、ネギ、しらたき、豆腐を盛りつけた。
- ⑥ ここで登場するのは食材、調理器具としての肉、野菜、しらたき、豆腐、鍋、割り下、コンロ、皿。
- ⑦ 夫は黙ってすき焼き用の鉄鍋と卓上コンロを用意し、皿の上に材料を盛りつけた。そんな夫を脇目に、妻はテレビのスイッチを入れ、「これ見たかったのよ」とお笑い番組を頬杖をつきながら無表情に眺める。
- ⑧ 新潟では牛肉、群馬では豚肉であるというのは、牛肉と豚肉では明らかに値段の差がある。
- ⑨ 関東風のごった煮すき焼きは京都の学生が肉を少ししか買えないので、野菜や豆腐で紛らわした貧乏人むけであり、これは人—金の関係にあたる。
- ⑩ 人—ものの関係で問題なのは、夕食のメニューのすき焼きである。そもそもその日の夕食がすき焼きでなければ夫婦喧嘩は起こらずにすんだ。
- ⑪ その日の夕食はすき焼き。スーパーで材料を買っているところをみるとこの家庭の経済状況はごく一般的で普通の家庭であることが伺える。

以上のように、この場面における人—ものの関係は、スキヤキに必要な材料や調理器具であるが、そもそも食材が牛肉か豚肉かの違いが家族内の人間関係でエレジーを味わう元凶になっている。またそれはサブシステムとしての人—お金の関係にまで展開し、豚肉による関東風のすき焼きは牛肉による関西風のすき焼きを食べられない貧乏ゆえの食べ方として考え出されたことにまで話は至る。

7. 問題点および解決方法

以上のようなM—Mシステムによる分析をもとに、学生はこの家族の問題点とその解決方法を次のように記述した。

【学生のレポートから】

- ① この家族の問題は会話のないことである。話題は何でもよいから話す時間を大切にしていけば自然とこのような状態はなくなるだろう。
- ② 食事とは本来家族団欒の場であり、食を楽しみ、栄養と共に精神的な満足も得られるすばらしいものである。そのことを考え、この家族は日常でも家族 3 人のコミュニケーションを増し、無意味に冷たい態度を示すのではなく、会話で伝えていくべきだ。
- ③ 妻と娘のあまりにも冷たい態度に家族のあり方について考えさせられた。解決策としてはもっと会話のある暖かい家庭を築くべきだ。
- ④ この家族が円満にやっていく解決策としては、もっと 3 人ともお互いに向き合い、会話、コミュニケーションをとろうとする気持ちを持つべきなのではないだろうか。
- ⑤ この家族で問題なのは、それぞれが自分勝手であることだ。3 人がもっと会話をするといいことだ。
- ⑥ 妻と夫に互いのことを尊重し合う心が足りない。文化の違いや、生活の違いはあって当たり前。これを共有し、共存しあって人間は家族になり、生きていくものである。解決策はお互いを思いやり、尊重し合うことが大切。娘の存在がとても良い役割を果たしているように思えた。
- ⑦ 夫が関西風のスキヤキを食べたければ、家族になぜ食べたいのかを話すべきだ。
- ⑧ この問題点の解決方法は関西風と関東風の両方のスキヤキを用意し、一つのテーブルで食べることである。そうすれば互いに関西風の良さ、関東風の良さを知ることができ、一つのテーブルで食べることによって、夫婦間の会話も生まれ、夫婦関係も良好になると考えられる。
- ⑨ このままでは夫はストレスが溜ってしまう一方である。2つの鍋とコンロを用意し、それぞれの食べたい方法で調理をするか、交互に調理方法を替えて行くのが解決方法である。
- ⑩ 夕食というのは家族のコミュニケーションをとる大切なことなのに、その役目をこの食事は果たしていない。人と人のつながり、人ともものつながりが欠けている。
- ⑪ 家族は同じ食卓を囲むのだから、一人独断で決めるのはよくない。ましてやスキヤキというみんなで囲んで食べるもので、いろいろな地域で違った食べ方のあるものは相談して決めるべきだろう。だがどこでも我家の味というのがあり、ついつい新しいものは排除し又いつもの味になってしまいがちだが、新しいものを取り入れてよりよい我家の味を作っていくのも楽しいであろう。

- ⑫ 娘も言葉使いに注意してもっと聞く耳を持つべきだ。夫はもっともっと強く言い返しても良いと思う。
- ⑬ 夫はもっと父親の威厳を主張すべきだ。そうしないとすれ違っている家族の気持ちは解消されない。
- ⑭ 問題点は、妻が夫に無関心な点だと思う。娘が「食べないの」といって同情した。娘のその一言が夫にとってはとてもうれしいことだったと思う。
- ⑮ この日は妻が疲れていることを考え、夫も妻や娘といっしょに関東風のスキヤキを食べ、関西風のスキヤキは別の機会に食べるべきだと思った。
- ⑯ やはりこの家庭の「わが家のすき焼き」は関東風であり、夫はあきらめるしかない。
- ⑰ 娘は夫と妻の仲介役をやるべきだ。
- ⑱ 娘と一緒に暮らしていることで妻に味方がつき、“かかあ天下”になっている。娘が家を出ることで1対1になり今まで見えていなかった夫の優しさや妻の気持ちが見えてくる。話し相手がお互いだけになると、会話も増えていく。
- ⑲ この解決方法は、夫がちゃんと妻に意思疎通をすることにある。妻も夫に対してもう少し寛容な気持ちを持っていれば、楽しい夕食を迎えることができたであろう。
- ⑳ 食べること、すなわち食事は食べる人の心を育て、癒し、憩いの場ともなり、家族団欒のコミュニケーションにもつながる。

この家族の問題点とその解決方法として、夫婦間の会話・コミュニケーションの必要性や、意思疎通の大切さをあげた学生は、ここに取り上げたもの以外を含めて16人、家族間の思いやりの必要性をあげた学生は14人、それぞれに家族の絆の大切さに思い至っている。即時的な解決策としては、2つのコンロで関西風と関東風のすき焼きを同時に作ることをあげた学生が2人みられた。また夫はもっと威厳をもって自己主張すべきであるとする一方、「夫はあきらめるしかない」とする意見もみられた。娘の同情が夫の悲しさを救うと考え、娘を夫婦の仲介役として位置づける場合と、逆に娘の独立がこの夫婦の危機を救う方法であると考えた学生もいた。

8. まとめ

「スキヤキ・エレジー」を題材にして、食文化に関する短文をM-Mシステムで分析した学生のレポートをとおしてつぎのいくつかの点が明らかになった。

学生は極めて日常的な「生活」というものがいろいろな要素から形づくられていることを理解し、またそれを分析する方法があることを体験的に学んだ。

また、人間生活学科における学びの特徴である総合的な立場についてもその一端を理

解したと考えられる。「食」に関する学びでも、本学科での場合は、栄養学の生理学的、生科学的な知識に限らず、食生活がどのような地域や場面で、どのような人間関係のもとに行なわれているのかにまで思い至る必要があること。さらに食という日常的な営みが人生の機微に触れることも多く、また人と人とのコミュニケーションにとって大きな役割を果たしていることを理解したと思われる。今後学生には、食生活が社会環境や自然環境との関わりの中で営まれており、それらとの関係で抱える問題点や課題も含め、さらに食生活の将来のあり方にまで興味関心を広げていってほしいと考える。

注

- 1) 寺出浩司：生活文化論への招待,弘文堂,1994年,p.12-13,および日本生活学会：生活学会の方向と生活学の内容,生活学会報,創刊号,1982年,p.15-16.
- 2) 石毛直道他編：食と人生—81の物語,(社)農山漁村文化協会,2001年,p.55-57.